金井先生の思い出

星野　靖二

この度の金井先生の御退官にあたり，私は不肖の生徒ではありましたが，今までの御指導が感謝の念と共に思い出されます。

思い起こせば，先生にはじめてお会いしたのは東大宗教学の大学院受験について相談に乗っていただいた時でしょうか。他大学から受験を考えていた私は，宗教学研究室に知り合いもおらず，色々迷った末に思い切って先生に大学院受験を考えている旨手紙を書くことにしたのでした。その後しばらくして直接お電話をいただき，非常に恐縮したことを覚えています。

そして実際にお会いした際には親身に相談に乗っていただき，問題意識や研究の方向性等について貴重な忠告を頂戴しました。更に何より印象的だったのは，不安で一杯だった私を安心させるような，先生のお人柄の醸し出す暖かい雰囲気で

あり，また「星野君，頑張りなさいよ」というお言葉でした。

このように研究生活の出発点において先生から励ましをいただき，また大学院の修士・博士課程を通じて御指導を受けることができたのは幸運なことだったと思っております。ゼミや論文指導はいうまでもないことですが，お忙しい中各種の推薦状の作成を快く引き受けていただいたことや，博士課程に進んで始めて参加した宗教学会の大会で，右も左も分からず緊張していた私を他の先生方に紹介していただいたことなど，忘れることができません。

研究に関しては，修士論文で近代日本におけるキリスト教を取り上げたこともあって，宗教学として日本のキリスト教をどのように論じていくかということに関して色々とお話を伺いました。これに関して思い出されるのは，私がある事例について一面的な読み込みをしてしまったことに対して，それとなくより広い文脈に置き直すことを示唆していただいたことです。私の提示した解釈は今から思えば恥ずかしいような近視眼的なものでありましたが，先生はそれを面と向かって批判するのではなく，間接的により文脈に即した妥当な解釈を提示して下さったのです。

もっとも出来の悪い生徒である私は，それに気づいたのは少し時間が経ってからのことでした。その後その事例についての研究を進めていたある時，先生の意味していたところがはたと了解されたのです。それは自らの中で新たな解釈が整合的に立ち現れるという知的興奮を伴う瞬間でありましたが，同時にすでに先生にその解釈につながる道筋を示唆していただいていたことに気づいた瞬間でもありました。それ故，もちろん研究の進展を喜ばしく思い，また先生の御指導をありがたく思いながらも，それをその場で理解することができなかったことについて幾分忸怩たる思いを抱いたのでした。

これは最も印象的な出来事でしたが，後から先生のお話の意味を理解することができるようになるという体験はこれだけではありません。このように考えると，先生の御指導はあくまで私が私なりに納得した上で到達できるように道筋を示して下さるようなものであったように思います。

あるいはこうした形で出来の悪い生徒に指導することは，もしかしたら先生御自身にとっては，伝えたい事の一部しか伝えられない不満の残るものであったかもしれません（そしてそれすらきちんと受け取ることが出来ているかどうかと自問しております）。しかしながら，とにかく私自身にとっては，そうした先生のお話を自分の中で実感を伴って理解することができるようになるということは，まがりなりにも自分の研究が進展しているということを指し示すものでありましたし，またこれからも研究の折に触れてそうしたことがあるのだろうと思っています。

以上駄文を連ねてきましたが，先生の今までの御指導—未だ捉え切れていない宿題も含めて—と，そしてあの「星野君，頑張りなさいよ」という言葉に，一人の不肖の生徒が心から感謝していることを是非ここに記しておきたく思います。先生，今まで本当にありがとうございました。